
平凡な女の平凡な「内側」。

絢佳。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平凡な女の平凡な「内側」。

【Nコード】

N9462C

【作者名】

絢佳。

【あらすじ】

何処にでもいる、よくいる女のよくある日常。世間に見せる表側と、誰にも言えない内側の話。

FILE0：女のこと。（前書き）

この話は事実に基づいたりリアルな内容になっていますが、登場人物の名前やその他名称は架空のものです。

FILE0：女のこと。

私の名前は、アヤ。

27歳、A型、仕事は水商売。

最終学歴は私立校卒業。

今は、実家を離れて一人暮らし。

OLもやったし

パチンコ屋で働いたこともある。

今まで付き合った人数は10人以上。

経験人数は、もう少し多い。

家族は父、母、兄が二人。

親友と言える友人は何人か居る。

知り合いもそれなりに居る。

特別な特技だとかはなくて

どれもこれも何となく好き。

流行モノも、そうじゃないモノも。

でも何となく人と同じは嫌だっと思ってる。

だから時々、特殊なモノを選んでみたりする。

だけど余りにも周りからはぐれてしまうと不安になる。

それなりに「個性」を主張したいだけで

それなりの「協調性」は持っていると思う。

性格は、決して乙女チックなほうではない。

見た目も含めて。

よく他人から言われる第一印象は

「怖い」「気強そう」

こんな感じ。

決して話し方も綺麗だと言える方ではないし

大人しいほうではない。

27歳としては、少し落ち着きがないと思われるかもしれない。

気が強いのも確かなのだが

それは小心者の裏返しだったりする。

私は、激しく小心者だ。

お調子者になってみたり

姉御肌になってみたりするけれど

実際はとても小心者だ。

常に人の目が気になるし

嫌われたくないって思ってきた。

だから、人間関係はそこそこ上手くやってきたつもりだ。

でも、その小心が悪化しすぎて

私は自分を見失いがちになった時があった。

よくある「情緒不安定」ってヤツだったんだろうけど

気がついたらそれは世間一般でいう「病気」に進化してしまった。

不眠、自己嫌悪、被害妄想。

それは止まる事を知らず
階段を転げ落ちるみたいに私は壊れていった。

自殺願望、薬物依存、幻覚幻聴、過呼吸、自傷行為、フラッシュバック。

そして私は「鬱病」と診断された。
最初は認めたくなかった。

でも今は思う。

よくある病気。

風邪と一緒にじゃないか。

ココロが何らかの菌に侵された。

それだけのことだ。

今の世の中、よく「鬱」って聞く。
日本人って病んでるって思う。

だから、私は特別じゃない。
だから、私は変じゃない。

何年、鬱と戦ったんだっけ。

よく判らないけど

今は大分落ち着いていると思う。

普通に仕事も出来るし、会話も出来る。

毎日何十粒という薬なんかなくても

それなりに生活している。

もう、鬱ではないんじゃないかとも思う。

そりゃあ不眠は治ってはいないし

たまに堕ちることもあるけれど

そんなの誰にでもあることだと思うから。

特になんてことはない。

私は、よくいる女でよくある日常を過ごしている。

極普通の、27歳の女。

FILE 1：笑顔の男のいと。

その男の名はタイガと言った。

19歳。

あからさまな今時っ子。

髪はメツシュで

話し方も何だか舌足らずだし

27歳の私から見たら

本当にただのガキだった。

Yというお店で出会った。

Y店は小さなメンズパブ。

代表と、タイガと、タイガの相棒のショウの3人が従業員。

夜の仕事が初めてだと言った若い二人は

戸惑いを見せつつも

それなりに頑張っていた。

たまに顔を出すその店で

たまに会うだけでそれ以上の事はなかった。

正直ビジュアルだけでいうなら

ショウのほうがちょっとジャーニーズ系の顔で

話も面白かったし好きだった。

タイガは頭が悪くてお調子者。

「馬鹿だなあ」とよく思ったけど

タイガは笑って誤魔化すのか上手だった。

その笑顔がいかに子供っぽくて

何だか可愛らしくて憎めなかった。

だけど、タイガもショウも諸事情で程なくその店をやめた。
それっきり。

何度かメールとかはきてたような気がするけど
会ったりすることもなかったし
特に気にする相手でもなかった。

出会ってすぐ、Y店の代表に

「タイガはアヤがかなりタイプらしいよ！」
と言われたけれど

所詮そんなものは営業トークだし
何せそんな8歳も下の男の子にそんな事言われても
さすがにどうする気にもならなかった。

タイガが店をやめて半年経ったくらいの頃だったかな。

「間違って電話番号だけ消しちゃったので、番号教えてください」
というメールがきた。

（別に電話とかしてくる用事もないんじゃないや・・・）
と思いつつ、一応メールを返信した。

そうしたら彼は律儀にもすぐに電話してきた。
久しぶりだねー、等と他愛もない会話をしただけ。

でもそれから頻繁に電話が来るようになった。
最初は3日に一度くらい。

それがその内毎日に等しいくらいになった。

電話の内容は特に中身はなかった。

タイガの元カノの話とか学生那时的話とか。

「いま起きたー」とか

無駄に寝起きで即効電話をかけてきたりした。

不思議とそれをウザイとは思わなかった。

私は正直寂しがりやで

そういう何でもない連絡がくることが何となく嬉しかった。

そんな毎日が続いて

ナチュラルにタイガは「アヤさんのことが好き」とか
言い始めるようになっていた。

でもさすがに私は「はいはいアリガト」くらいに流していた。

普通に彼女とかいるんだろうと思ってたし

それ以前に年の差とか、タイガのチャラ男っぷりを知っていたから
真に受けることはなかった。

それでもタイガはめげなかった。

あらゆる手段で、私にぶつかってきた。

それでも私は中々首を縦にはふらなかった。

（さすがにこんな年下とは付き合えないなあ）

その考えが頭から抜けなかった。

だから電話をする以外

遊ぼうと誘われても行かなかった。

それでもタイガはめげない。

そうこうしてる内に2ヶ月くらい経ったのかな。

1度くらいイイか・・・という気持ちで

一緒にご飯を食べにいった。
すぐ帰るつもりだったけど

「プリクラとりたい！！」とタイガが駄々をこねた。

正直19歳と歩いてるだけでも

周りからどう見ても私は年上に見えるだろうし

プリクラとか恥ずかしいなあっていう気分だったけれど

子犬のように懇願するタイガに負けてゲームセンターに行った。

いま思えばタイガも多少の緊張や遠慮があったのか

初めて二人でとったプリクラは

微妙な距離感があったような気がする。

私自身にも、何か変な緊張感があったような気がする。

タイガがプリクラに書いたイタズラ書きは

「今日が記念日」だった。

「何勝手に記念日にしてんの？」と笑って言ったら

「いいの！記念日なの！」とタイガはニヤニヤ笑ってみせた。

「ニヤニヤ」って言うと

あんまりいいイメージは湧かないかもしれないけれど

タイガは本当に子供が悪戯したときのような

ニヤニヤした感じで笑うのだ。

それが私には可愛く見えた。

タイガは本当によく笑う子だった。

困ったときも

楽しいときも

ずるいこと言ったときも
誤魔化したいときも
ただ目があっただけでも
よく笑う子だった。

それから1ヶ月もしないうちに
私とタイガは付き合うことになった。

年の差だとか

私の性格上の問題だとか

色んなことは引っかかっていたけれど

そんな事幾ら理由にしたって

タイガは納得しなかったし、必至だった。

でも恋愛なんてそんなもんで

最初の内は熱くなってるから

どんな壁でも越えられるような気がするものだ。

でもそれが何時か冷めてしまうことも

私は知っていたし

かといって言い聞かせても

今のタイガに理解なんて出来ないことも判ってた。

4割くらいは、押しに負けたような感じだった。

けど

私自身も年下の可愛いタイガと

「もしかしたら、今度こそは」っていう期待があったことも確かだった。

殆どは有り得ない、っていう気持ちだったけど
やっぱり多少の期待はあった。

自分の事を好きだって言われて
嫌な気はしなかった。

考えていたよりも

タイガは私に対して真剣に話してくれた。

19歳は19歳なりに、一生懸命考えてくれて
案外真面目な部分もあるんだなあってその時知った。

私も好きになれればいいな、って感じで
私たちの付き合いは始まった。

この時は思わなかった。

立場が逆転することになるなんて。

FILE 2…小柄な女の子のこと。

私がよく飲みに行く店のひとつにF店というメンズパブがあった。

当時、私はその店のユウという男にベタ惚れだった。毎日通うくらい好きだった。

その内、F店の常連の顔を覚えてしまう位に自分も常連になっていた。

その常連の一人に気になる女の子がいた。

その子は小柄で、とても歌が上手な子だった。

どう見ても私よりは年下だろうけど

服装とかは今時のギャルっぽい感じとかではなく個性がある子だった。

雰囲気とかも、若い子独特のキャピキャピしてる感じはなくてどっちかっていうとクールな感じ。

その子もよく一人で飲みに来ていた。

狭い店だからしょっちゅう見ていれば名前くらい把握してしまうもので

私はすぐにその子の名前が「アスカ」だという事を知った。

アスカは、ユウの相棒であるシゲがお気に入りなんだってことも。

おそらくあっちも私の顔はもうわかっているだろうしお互いよく一人で飲んでるから

私は「仲良くなれないかなー」とか思っていたけれど若い子が何となく怖くて話しかけられずにいた。

ある日、話の流れでユウとシゲとアスカと私で店が終わった後にご飯を食べに行く事になって

私はここぞとばかりアスカに絡んではみたのだけどその時のアスカの反応は薄かった。

「あー私嫌われてるのかも・・・」と思ったけど

その後何度と無くF店で顔を合わせて

挨拶とかしてる内に「メアド教えてください」って

アスカが言ってくれて、私はメチャクチャ嬉しかった。

それからF店で一緒に飲むようになって

休みの日にカラオケに行ったりご飯食べたりするようになった。

18歳のアスカと26歳だった私。

8歳も年の差があったけど

私はアスカが大好きになってた。

色んなことをアスカに話したし、アスカも話してくれるようになっていた。

年の差とかを感じない程

アスカは考えが大人だったし

性格も似ているトコロが多かったから

私はアスカの前で「年上だし」と虚勢を張ることもなかった。

地元から離れてこの街に来て

初めて「親友」になれるかもしれないと思えた子だった。

アスカと出会って1年が過ぎた。

私とタイガが付き合い始めた頃、アスカは彼氏と別れた。

アスカが泣いて電話してきたのは

その時が初めてで、私は凄く辛かったのを覚えている。

一言一言を搾り出すように話しながら、鼻をすすっていた。それでも所々はいつもとおり強気な話し方でそれがまた私には辛かった。

「このまま別れてもいいの？」と聞いたら

「・・・・正直別れたくなんかない・・・・」と

素直に答えたアスカが可愛くて、でも悲しくて私も泣けた。

アスカも私も、どっちかというと

典型的な「恋愛体質」だから

彼氏が居るとベツタリ。

だから別れると生活にポツカリ穴が空いてそれをどう埋めたらいいのか判らなくなる。

だからアスカが彼氏と別れてからは

2人で飲む回数が増えた。

その頃タイガも違う店で働き始めていたので2人でタイガの店で飲むことが多かった。

そこで、タイガの店の店長のタロウとアスカは出会った。

私はタロウは前から知っていたし性格も好きだった。

面白いし二人でいつも馬鹿話をしてた。

タロウが「アスカちゃん可愛い！」って言い出したとき正直私はちょっとワクワクしたし

二人がうまくくっつかないかな？なんて思ったりした。

そうしたらタイガと私、アスカとタロウ

4人で遊べて超楽しいじゃん!とか
先走った妄想をしていたのだけど

それは案外ハズレじゃなくて

二人はあっという間に距離が縮まっていった。

アスカに「ぶっちゃけどうなの?」って聞いたら
「結構ありかも」とニヤけて答えた。

これはマジであるかもなあ、って私は浮かれてた。

自分の彼氏と、仲のいい友達カップルで遊ぶとか
そういうツルんでる感じとか

私は大好きだった。

何か仲間って感じで、それだけで嬉しかった。

それにアスカと近い場所で恋愛の話が出来る。

お互いにお互いの男を知っているから、話もしやすい。

そういうのが何だかとても楽しかった。

私、アヤは27歳。

タイガとアスカは同じ年で19歳。

タロウは21歳。

年はバラバラだけどタイガとタロウの仲も良かったし

私達の未来は薔薇色って感じだった。

大袈裟だけどね。

アスカと私の関係も、益々濃くなった。

アスカは私の気持ちをご大体理解してくれていたように思うし
いちいち言わなくても

私のことを考えて行動してくれた。

アスカのほうがよくよほど大人だと、何度も思った。

アスカが居なかったら、今の私も無かったかもしれない。
それくらい私はアスカが大切だったから
同じ時間を共有できることが嬉しかった。

でも、そんな薔薇色の未来予想図はほど無く崩れることになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9462c/>

平凡な女の平凡な「内側」。

2010年10月20日20時39分発行